

最終回：PECの大規模比較実証事業について (5)

—今までの大規模比較実証事業の流れと裏舞台

第25号から始めた本シリーズも早1年。その間大規模比較実証事業をとりまく環境もドラスティックに変わった。1996年の当初計画ではサウジ側カウンターパートが環境省、都市村落省、企画省、大学等候補が決まらず、事業も100%カフジで日本側提案の実証事業のみが行われるもので、基本計画によれば計画緑化面積は45haであった。97年も押し迫ってから King Abdulaziz City for Science and Technology (KACST) がカウンターパートとなり、日本側の提案のみによる基本計画の修正が行われた。そして、予算規模を変えずに KACST 提案の研究のために予算をリシャッフルする事となり、1997年12月には大規模緑化比較実証事業協定覚書が調印された。これらの経緯で、事業開始が実質的に1年8ヶ月遅れる事となり、カフジで実施する予定だった日本側提案の研究も KACST のあるリヤド及びムザヒミヤ研究施設へ98年4月に移ることとなった。カフジとリヤドの2地区に事業が分割されたことで、基本計画の内、カフジでの緑化関連予算は全体の7割となり、そこから捻出した3割がリヤド地区の KACST 提案の研究に回されることとなった。この予算配分決定交渉にも時間を要したことに加え、カフジの大規模緑化比較実証事業用地買収が完了したのは、98年も夏が終わってからのことであり、カフジでの工事の公式の着工は98年12月になってからであった。一方リヤド地区では、KACST が持っていた研究圃場(ムザヒミヤ研究施設)を本事業に一部使用出来ることになったが、その使用のために必要な工事着工も約半年遅れ、そして業務委託先であるアラビア緑化の現地法人登録も大幅に遅れた。このことは人員の雇用の遅れ、工事資機材調達の遅れにつながった。これらの他、全体進捗の遅れの原因としては、カフジの水処理施設計画において、下水処理場との取水地点をめぐる交渉が長引いたこと(98年暮れ~99年秋)、電力を自家発電にするか電力供給会社からの電力にするか(KACST の意向もあり電力供給会社からの電力になった)でも交渉が長引いたこと(99年1月~6月)等があげられる。この間2回(97年度98年度)の単年度予算交渉の結果、カフジの予算規模は、リヤド地区の研究へのリアロケーションもあり、当初の6割まで減少した。99年11月にはサウジ側から本事業の3年間の延長願いが公式に出されたが、日本側がこれに対する公式な返答をせぬまま、唯一の外国石油開発会社であるアラビア石油とサウジとの採掘権交渉が暗礁に乗り上げた(99年11月~12月)。そして明るる2000年の2月には、通産大臣の訪サによる石油大臣との最後の直接交渉が行われたが、鉄道建設を石油採掘権の見返りに要求するサウジ側との交渉は決裂。カフジに於ける同会社の長年の採掘権が遂に失われるに至った。本稿執筆時(2000年3月)では同会社の日本人社員の大量早期退職や会社存亡云々についてマスコミでも取り上げられたのは記憶に新しいところである。カフジ実証圃場の緑化面積は最終的には1haにとどまるものと見られており、ミニマムオペレーションで幕を閉じることになる予定である。2000年3月現在、カフジの水処理施設はまだ完成しておらず、一方リヤド地区(ムザヒミヤ研究施設)での実証研究は着実に進められているところである。共生微生物については土壌から分離が行われ、出光興産の研究員が日本へ持ち帰った微生物を、目下増殖培養しているところである。しかし全体として実質的には99年後半から稼働しはじめたわけであり、発表できる結果及び成果については今後のデータの蓄積を待たねばならないであろう。

本事業に関し、サウジ側で広い視野から事業を見ていた人物がいる。カウンターパートである KACST の自然資源・環境研究所所長であるアルサリ博士である。同博士が切々と訴えておられたことは、一言でいうなら「サウジの若手研究者・人材の育成」であった。だいぶ前から「国造りは人づくりから」とは何度も言われてきたことである。サウジアラビアのみならず、湾岸産油国はペドウィンの世界から数世紀を飛び越えて近代国家の様相を整えてきた。事の是非はともかく、それらの国々は、近代国家運営のために外国人労働者に頼らざるを得ないのが現実である。KACST と言えば欧米で博士号を取ってきた優秀な人材が溢れている、と誰しも思う事であろう。しかしその実体はサウジ人研究者達が現場経験に乏しく、実験機材の操作にも支障をきたしているという厳しい現実であった。サウジアラビアに関する情報はややもすれば石油関連の情報やその厳しい宗教戒律などに関心が偏っているように思う。我々も含めてその歴史や人々や環境といったもっと一步懐に飛び込まねば知り得ない情報に接する機会が限られているとも言えるし、飛び込もうとさえしていないから知ること出来ないのかもしれない。彼らが本当は何を望んでいるのかを示唆する言葉をアルサリ博士から叱責される形でメールで受け取った。いつまでも頭の中で響き続けるその言葉で本シリーズを終えたい。「おまえだけは、未長くこの地にいてくれると信じていた。しかし、おまえまでもが。」



カフジ実証地

